

不定名詞句における特定性の概念について

古川直世

§0. はじめに

不定名詞句の特定性に関する問題は、Baker (1966) による特定の (specific) および非特定の (non-specific) の術語の導入以来、活発な論議の対象となっているが、特定性の概念の理解については、一般に、混乱があるように思われる。

本稿の目的は、性質の異なる二つの特定性の概念が、一般には、混同されている、ということを主張することにある。何故、二種類の特定性を区別する必要があるのかと言えば、この区別が、不定名詞句の特定の用法・非特定の用法と Donnellan (1966) によって指摘された定名詞句の指示的用法 (referential use)・限定的用法 (attributive use) との関係を論ずる際に、重要な意味をもたらしてくるからである。実際、不定名詞句の特定性と定名詞句の指示性との係わりを考察したいくつかの論文においても、2種類の特定性の存在に気付いていないために、誤った主張をするに至っているように思われるのである。我々は、既に、古川 (1979) において、この問題を考察したが、筆者自身、二種類の特定性の存在を認識していなかったため、本稿において再び考察を加えてみたい。

なお、不定名詞句の特定性に関する文献は、大部分、英語を研究材料とした論文であるが、この種の意味論上の問題は、当然、冠詞をもった言語であるフランス語にも見出される問題であるので、英語とフランス語の両言語を視野に入れながら、論を進めて行くことにする。

§1.0. 二種類の特定性について

二種類の特定性とは、一つは、不透明な文脈 (contexte opaque) において非特定性と対立する特定性であり、今一つは、透明な文脈 (contexte transparent) において唯一的に決定される特定性である¹⁾。本来の意味での特定性の概念は、

不透明な文脈における不定名詞句に見出される概念である、と言ってよいであろう。しかしながら、透明な文脈において唯一的に決定される特定性の概念が無視しえない重要な概念であることを、以下みることになる。

§1.1. 不透明な文脈における特定性

まず、不透明な文脈における特定性から概観しよう。「未来」のような不確定的要素を含む文に置かれた不定名詞句は、特定性に関してあいまいである、と言われる。次の文 (1)

(1) Jean veut attraper un poisson.

において、不定名詞句 *un poisson* は、二通りに、あいまいである。一つは特定の読み、今一つは非特定の読みであり、この二つの読みの相違は、通例、それぞれ、次のようなパラフレーズによって示される。

- (2) a. Il y a un poisson tel que Jean veut l'attraper.
b. Jean veut qu'il y ait un poisson tel qu'il l'attrape.

このようなあいまい性は、次のような談話における代名詞の相違によって、一層、明らかとなる。

- (3) a. Jean veut attraper un poisson. Il l'attrapera demain.
b. Jean veut attraper un poisson. Il en attrapera un demain.

以上のように、不透明な文脈に置かれた不定名詞句における特定性の概念は、直観的にも十分に理解しうる概念であり、ここまでの段階では、余り問題はないように思われる。ある指示対象が特定のであるか非特定のであるかということは、実際の言語使用の場において、聞き手にとって実感されうることであるからである。

問題は、この特定性の概念が、透明な文脈においては、いわば、ぼやけてくる、というところにある。

1) この二種類の特定性の概念については、論理学者 Geach (1962, p.69) の次の一節より示唆を受けた。≪There is an amusing paralogism to prove that a cat who watches a mousehole will not catch what she waits for. She cannot but catch some determinate mouse if she has any success at all; but she was waiting just for *a* mouse, not for any determinate mouse. ≫

§ 1.2. 透明な文脈における特定性

二種類の特定性の存在は、透明な文脈、たとえば、不確定的要素をもたない過去時制の文を考察すれば、明らかになってくる。

次の文 (4)

(4) Jean a attrapé un poisson.

において、不定名詞句 *un poisson* は、特定のにのみ解釈される、と一般的に言われる²⁾。何故、このように考えられているのかは、「ジャンが掴まえた魚が一匹、現実世界に存在する」という理由からである、と言ってよいであろう。すなわち、次の文 (5)

(5) Il y a un poisson qui a été attrapé par Jean.

は、文 (4) が真であれば、常に真であるからである。さらに、言葉を変えれば、いわゆる「存在の一般化」(*généralisation existentielle*) が成り立つからである、と言ってよい。

ところが、一方、文 (4) は、少なくとも原理的には、次のようなパラフレーズ (6) a, b によって示されるように、二通りに、あいまいでありうるのである³⁾。

(6) a. Jean a voulu attraper un gros poisson qui passait devant ses yeux et il l'a attrapé.

b. Jean a voulu attraper un poisson et il en a attrapé un.

それでは、(6) a によってパラフレーズされる特定性の内容と、文 (5) によって示されるような意味で、唯一的に特定のと決定されている場合の特定性の内容との間には、どのような異同があるのであろうか。

まず、存在の一般化が成り立つという点では、(6) a によってパラフレーズされる特定のな読みの場合も、文 (5) によって示されるように、唯一的に特定のと決定されている場合も、同じである。前者の場合、「ジャンが掴まえよう

²⁾ たとえば、Fodor (1979, p. 334) は、*John caught a fish*, という文を挙げ、このように記している。

³⁾ たとえば、Pavel (1976, p. 135) は、同一の文ではないが、次のような文 (a) を挙げ、特定のな読みのパラフレーズとして (b) を、非特定のな読みのパラフレーズとして (c) を挙げている。

(a) *J'ai parlé à un prêtre.*

(b) *J'ai parlé à un prêtre quelconque.*

(c) *J'ai parlé à un prêtre que je connaissais depuis longtemps.*

とした魚が一匹、現実世界にいる」からであり、後者の場合、「ジャンによって掴まえられた魚が一匹、現実世界にいる」からである。

では、一体、どこに相違があるのであろうか。ここで、存在の一般化が成り立つのが、「いつの時点」であるのか⁴⁾、すなわち、「特定性」という資格を、「いつの時点」で獲得するのか、ということが係わってくるのである。「いつの時点」ということになれば、当然、「発話時」という基準が浮び上がってくる。

そこで、発話時 (t_0) を基準として、発話時前 ($t-n$) と発話時後 (t_n) とを区別し、この時点の観点から、文 (7) を検討してみよう。

(7) [= (4)] Jean a attrapé un poisson.

(6) a, b によって、それぞれ、パラフレーズされる特定性と非特定性、および、唯一的に特定のと決定されている場合の特定性は、次のような図表 (A) の中に、位置づけられるであろう。

(A)

時 点 読 み	発話時前 ($t-n$)	発話時 (t_0)	発話時後 (t_n)
特 定 的	特 定 性		
非 特 定 的	非 特 定 性	特 定 性	

ここで、発話時前 ($t-n$) において、非特定性 ($t-n$) と対立する特定性 ($t-n$) は、文 (1) において見た非特定性に対する特定性と同一性質をもつことが分かるであろう。図表 (A) のような図表を文 (8)

(8) [= (1)] Jean veut attraper un poisson.

の場合に戻って、考えてみると、次のようになる。

(B)

時 点 読 み	発話時前 ($t-n$)	発話時 (t_0)	発話時後 (t_n)
特 定 的		特 定 性	
非 特 定 的		非 特 定 性	特 定 性

⁴⁾ 存在の一般化という表現は、発話時あるいは発話時前に指示対象が存在している場合に使われるが、ここでは広い意味で用いている。

図表 (A) における特定性 (t_n) と非特定性 (t_{-n}) の区別は、次の文 (9)

(9) Jean a attrapé un poisson et il l'a mangé.

が示すように、代名詞化テストにおいては、現われてこない。これに対して、図表 (B) における特定性 (t_0) と非特定性 (t_0) は、既に見た通りに、

- (10) a. [= (3) a] Jean veut attraper un poisson. Il l'attrapera demain.
 b. [= (3) b] Jean veut attraper un poisson. Il en attrapera un demain.

代名詞化の際に、言語的に表現される。

図表 (A) における非特定性 (t_{-n}) と特定性 (t_0) との関係は、このままでは、説明が複雑になるので、図表 (B) における非特定性 (t_0) と特定性 (t_n) との関係によって説明しよう。というのは、両者においては、関係の性質が同じであるからである。

図表 (B) において、非特定性 (t_0) は、特定性 (t_n) に移行する可能性もっている。特定性 (t_n) とは、「ジャンが任意の魚を掴まえるという行為を実現する」時点で獲得される性質である。注意しなければならないのは、特定性 (t_n) が獲得された段階でも、非特定性 (t_0) は保たれている、ということである。言葉を変えれば、非特定性 (t_0) と特定性 (t_n) とは、同一指示 (coréférence) の関係にあるのである。これは、次のような具体的な例で示すことができる。

(11) Jean veut attraper un poisson pour le manger pour son dîner.

非特定の不定名詞句 un poisson は、定代名詞 le によって受けられている。以上、図表 (B) における非特定性 (t_0) と特定性 (t_n) の関係について述べたことは、図表 (A) における非特定性 (t_{-n}) と特定性 (t_0) の関係に当てはまるのである。図表 (A), (B) を見て明らかな通り、時点が一つずれているにすぎないからである。

これまで述べてきたことを要約しよう。(6) a によってパラフレーズされる特定性の内容と、文 (5) によって示されるような意味で、唯一的に特定の決定されている場合の特定性の内容との異同は、存在の一般化が成り立つ、言い換えれば、指示対象の存在が決定しているという点では同じであるということ、しかしながら、図表 (A) によって明らかなように、「特定性」という資格を獲得するのが、前者の場合、発話時前 (t_{-n}) であるのに対して、後者の場

合は、時点が一つ遅れて、発話時 (t_0) であるということである。

§ 1.3. 不透明の特定性に対する透明の特定性の影響

§ 1.3.0. さて、我々は、次の文 (12)

(12) [= (4)] Jean a attrapé un poisson.

を考察した結果、二種類の特定性の存在を確認した。一つは、図表 (A) において、非特定性 (t_n) に対立する特定性 (t_n) であり、今一つは、特定性 (t_0) であった。以後、説明の簡略化のため、前者を不透明の特定性、後者を透明の特定性と呼ぶことにする。不透明の特定性は、不透明な文脈において最も明瞭に感じられる概念であり、透明の特定性は、まさに、透明な文脈においてしか見られない概念であるからである。

不透明の特定性と透明の特定性の、いわば、力関係はどうなっているのだろうか。結論から先に言えば、不透明の特定性は、透明の特定性によって、その存在が、いわば、ぼやけてしまう、と言ってよいと思われる。

文 (12) について具体的に言えば、「ジャンの頭の中にあった特定の魚」という意味での特定性は、あるいはもっと正確には、「ジャンが掴まえようとしたのは、特定の魚だったのか否か」というあいまい性は、「ジャンが掴まえた魚が現実世界に一匹いる」という意味での特定性によって、感じられなくなっていると思われる。

何故、このようなことになっているのかと問えば、それは、三つの時点の中で、話し手および聞き手にとって、言語活動上、最も重要なのは、発話時であるからという、ほとんど自明の理由からである、と言って間違いはないであろう。

以上のような理由から、文 (13), (14)

(13) [= (1)] Jean veut attraper un poisson.

(14) [= (4)] Jean a attrapé un poisson.

において、不透明の特定性に関するあいまい性は文 (14) におけるよりも文 (13) においてより明瞭に感じられるのであると思われる。

§ 1.3.1. これまで、透明な文脈の例として過去時制の文を取り上げ、不透明の特定性の概念が、ぼやけてしまうということを述べた。勿論、過去時制の文ではあっても、法動詞の場合には、やはり不透明な文脈を保持するので、不

透明的特定性の概念は、いわば、生きている、言い換えれば、特定性に関するあいまい性は聞き手に意識される。たとえば、文 (15)

(15) Jean a voulu attraper un poisson.

は、特定性に関して、あいまいである。図表によれば、次のようになる。

(C)

時 点 読 み	発話時前 (t-n)	発 話 時 (t ₀)	発話時後 (t _n)
特 定 的	特 定 性		
非 特 定 的	非 特 定 性		

図表 (C) を図表 (B) と比較して分かることは、図表 (B) に見られた特定性 (t₀) すなわち透明的特定性が、図表 (C) には見当らないことである。これは、勿論、具体的に言えば、発話時に「ジャンによって掴まえられた魚がいる」という存在の一般化が必ずしも成り立たないからである。したがって、特定性 (t-n) すなわち不透明的特定性は、透明的特定性に妨げられることなく、生きてくるのである。

§ 1.3.2. これまで述べてきたことに関連する興味深い言語事実として、réussir のような動詞を含む文における不定名詞句の非特定性の言語的表現に関するものがある。次の例を、Galmiche (1977, p. 33) より借用しよう⁶⁾。

(16) Paul a réussi à épouser une fille que sa mère ne

{connaisse pas. }
{connaîtrait pas.}

(17) ??Paul a épousé une fille que sa mère ne {connaisse pas.⁶⁾}
{connaîtrait pas.}

不定名詞句の非特定性が、フランス語では、関係詞節中の動詞の法すなわち接続法あるいは条件法によって表わされる、ということはよく知られているが⁷⁾、Galmiche の示したこのデータは、本稿で呼ぶところの透明的特定性と非特定

⁶⁾ 但し、Galmiche は単なる事実観察にとどまっており、何ら説明を加えていない。

⁷⁾ Galmiche の原文そのものには、?? の印はついていない。筆者が Galmiche の意図を読んでつけたものである。

性 (t-n) の力関係を示しており、極めて興味深い。

réussir を含む文 (16) が容認可能であるのに、réussir を含まない文 (17) は、何故、容認可能性の度合いが低いのであろうか。まず、文 (16), (17) どちらの場合も、「ポールが結婚した女性が現実世界にいる」という意味での特定性、すなわち透明的特定性が確立していて、「母親が知らない女性なら（極端には）誰でもよかった」という意味での非特定性 (t-n) へ、いわば、圧迫を加えている、という点では同じである。図表によれば、文 (16), (17) どちらの場合も次のようになる。

(D)

時 点	発話時前 (t-n)	発話時 (t ₀)	発話時後 (t _n)
読 み			
特 定 的	特 定 性		
非 特 定 的	非 特 定 性	特 定 性	

それでは、どこに相違があるのかと問えば、非特定性 (t-n) と、特定性 (t₀) すなわち透明的特定性との力関係に相違があると考えられるのである。文 (16) では、透明的特定性よりも非特定性 (t-n) の方が、いわば、力が強いため、透明的特定性を抑える結果、接続法あるいは条件法の使用によって非特定性 (t-n) を言語的に表現することが可能になっている。ところが、文 (17) では、透明的特定性よりも非特定性 (t-n) の方が、力が弱いため、透明的特定性に抑えられるので、非特定性 (t-n) を言語的に表現することが困難になる、と考えられる。

それならば、何故、文 (16) におけるように、réussir があれば、透明的特定性よりも非特定性 (t-n) の力が強くなるのか、言葉を変えれば、非特定性 (t-n)

7) 注意しなければならないのは、特定性と非特定性の区別が、関係詞節中の動詞の法の区別によって常に厳密に表わされるわけではないことである。つまり、関係詞節中の動詞が接続法あるいは条件法であれば、先行詞の不定名詞句は専ら非特定の解釈されるのであるが、直説法の場合には、必ずしも特定ののみ解釈されるというわけではない、ということである。Pavel (1976, p. 146) は、多数のフランス人とフランス系カナダ人に、(a) Je cherche un éléphant qui est petit, (b) Je cherche un éléphant qui soit petit, のような対の文を示して反応を求めたところ、文 (a) の un éléphant が必ずしも特定の解釈されるわけではないこと、一方、文 (b) の un éléphant は常に非特定のであるという反応が返ってきたと言う。

と限定的用法 (attributive use) の区別を不定名詞句にも認めうるか否かという問題は、これまでに、Partee (1972), Palacas (1977), D.J. Peterson (1974), P.L. Peterson (1976), Ioup (1977) らによって論じられてきた。大まかに言って、前二者は、定名詞句の指示的用法と限定的用法の区別が不定名詞句の特定の用法と非特定の用法に対応していると考えているのに対して、後三者は、指示的用法と限定的用法の区別は、不定名詞句においては、特定の不定名詞句にのみ当てはまる、と主張している。

我々は、古川_(1979) において、後者の主張に与する見解を述べた。本稿においても、この基本的な見解は変わっていないが、不透明的特定性と透明的特定性の区別が明らかになった現在、さらに細かく検討する必要があるように思われる。

結論から先に言えば、指示的用法と限定的用法の区別は、特定の不定名詞句にのみ当てはまる、と主張することは間違っていないけれども、この場合の特定の不定名詞句とは、まさに、透明的特定性をもった不定名詞句であるという条件を付け加える必要があるのである。何故、指示的用法と限定的用法の区別が、不透明的特定性をもった不定名詞句には当てはまらぬのかは、以下に見る通りである。

§2.1. 不透明的特定性と指示性

§2.1.0 既に見た通り、不透明的特定性とは、特定の非特定のあいまい性がある場合の特定性である¹⁰⁾。この場合の特定の非特定のあいまい性が、定名詞句における指示的用法か限定的用法かというあいまい性と、一対一の対応関係をもっていない、ということを以下に示したい。

出発点として、名詞句が、一般に、指示的部分と記述的部分から成り立っていることは、認めてよいであろう。この指示的部分と記述的部分を原理的に区別する観点から、不定名詞句の特定の・非特定の区別と定名詞句の指示的・限定的の区別との関係を検討してみよう。

まず、不定名詞句において特定の非特定のあいまい性は、指示的部分に関するあいまい性である。このことは自明のようであって、必ずしも自明ではないのである。というのは、特定のということが指示的部分に関する概念であることは、特定性と指示性の関係を扱っているほとんどの論文におい

¹⁰⁾ 説明の簡略化のため、本節 §2.1.0 および次節 §2.1.1 で特定のあいまい性という場合は、不透明的特定性をもつ、という意味であることを承知されたい。

て、暗黙裡に認められていると言ってよいが、非特定のということが指示的部分に関する概念であるということは、必ずしも十分に認識されてはいないように思われるからである¹¹⁾。

何故、非特定性の概念は、指示的部分ではなく、むしろ記述的部分に結びつけられやすいのであろうか。それは、非特定の不定名詞句の場合には、指示対象が唯一的に決まらないため、いわば、自動的に記述的部分のみが前面に出てくるからである。しかしながら、非特定の不定名詞句は記述的部分だけで成り立っている、というわけではないのである。実際、不定名詞句が非特定のであれば、直ちに指示対象が存在しないということになるわけではない。このことを示す例を、別個の論点をもつ Galmiche (1977, p. 33) から借用しよう。

- (20) Paul veut épouser une fille que sa mère n'aimerait pas, et il en a déjà rencontré pas mal.

文 (20) の前半部分の *une fille* が非特定のであることは、関係詞節中の条件法の使用によって分かる。そして、この非特定の *filles* の存在が、後半部分では含意されているのである。

以上のことから、非特定のということが指示的部分に係る概念であることは、既に明らかであろう。結局、不定名詞句が特定の非特定のかというあいまい性は、指示対象の指示的部分に関するあいまい性なのであって、記述的部分には直接関与しないのである。

次に、定名詞句の指示的用法・限定的用法と指示的部分・記述的部分との係わりを見てみると、この場合のあいまい性は、指示的部分に関するあいまい性ではなく、指示的部分と記述的部分のどちらが優勢であるかという、記述的部分をも含みこんだあいまい性である。たとえば、次の文 (21)

- (21) L'assassin de Dupont est fou. (Galmiche, 1977, p. 33)

において、指示的部分に関しては、「デュポンを殺した特定の人間」がいる（実際は自殺なのかも分からないとしても、少なくとも話者はそう信じている）のであるから、不定名詞句の場合のような特定の非特定のかというあいまい性はない。あいまい性は、話者の意図が、たとえばピエールという人間すなわち指示的部分にあるのか、あるいは「デュポンを殺すという狂気の沙汰」という点

¹¹⁾ まさに、この点の認識の欠如が、特定性と指示性との間に一対一の対応関係があることを主張する Partee (1972), Palacas (1977) に見られるのである。

すなわち記述的部分にあるのか、ということにある。

これまで述べてきたことを、図表で示すと、次のようになる。

(E)

	指示的部分		記述的部分
不定名詞句	特定の	非特定の	
定名詞句	指示的		限定的

図表 (E) から、特定の・非特定のが指示的・限定的と一対一の対応関係にないことは明らかであり、したがって、Partee (1972), Palacas (1977) らの主張は、誤った主張であるということになる。

§2.1.1. 非特定の不定名詞句の場合には、指示対象が唯一的に決定されないのであるから、指示的用法・限定的用法のあいまい性はいえませんが、特定の不定名詞句の場合にはどのようなになっているのであろうか。原理的には可能であるが、言語運用の面から見て、極めて困難に思われるということを以下で示したい。

たとえば、Ioup (1977, p. 239) の指摘によれば、次の文 (22)

(22) The casting director is looking for a handsome blond.

は、以下のパラフレーズによって示される通り、三通りにあいまいであると言う。

- (23) a. There is a particular individual who happens to be a handsome blond that the casting director is looking for.
 b. There is a handsome blond, some ideal type, that the casting director is looking for.
 c. The casting director is looking for any man who is handsome and blond.

(23) a, b は、共に、特定の読みであり、異なる点は (23) a が指示的用法であり、(23) b が限定的用法である点である。(23) c は、非特定の読みであり、同時に、限定的用法である。

しかしながら、Ioup の指摘する三通りのあいまい性は、以下の図表 (F) によって示す通り、いわば、二段構えのあいまい性なのである。

(F)

	あいまい性(I)	あいまい性(II)
不定名詞句の読み	特定の	指示的 限定的
	非特定の	

あいまい性 (I) における特定の読みは、確定された読みではなく、あくまでも、仮定的な読みである。このような仮定的な読みの上に、さらに、あいまい性 (II) において、指示的用法と限定的用法に関するあいまい性があるのである。聞き手にとって、このような二段構えのあいまい性は、いわば、負担過重であり、実際の言語活動の場において、意味をもってくるあいまい性であるとは考えにくい。

これに対して、定名詞句の場合には、指示対象の存在が聞き手にとって確認可能である（少なくとも、話者によってそうみなされている）ので、言い換えれば、指示的部分に関するあいまい性がないので、指示的用法と限定的用法の区別も可能になると考えられる。

§2.2. 透明的特定性と指示性

§2.2.0. 不定名詞句において、指示的用法・限定的用法のあいまい性を認めることができるのは、まさしく、透明な文脈にある不定名詞句の場合である。

何故、透明な文脈では、指示的用法・限定的用法の区別が可能になるのだろうか。それは、透明な文脈では、指示対象の存在が確定しているからである。透明な文脈の例を、特定性に関する論文からいくつか借用しよう。

- (24) I talked with a logician. (Karttunen, 1968, p. 7)
 (25) I heard that from a doctor. (Partee, 1972, p. 420)
 (26) John married a girl with blue eyes. (Givón, 1973, p. 99)
 (27) She's going to marry a doctor, but I don't even know his name yet. (D.J. Peterson, 1974, p. 91)¹²⁾

これらの文中の不定名詞句は、動詞の時制によって、指示対象の存在が確定し

¹²⁾ 文 (27) は、前半部分のみでは、完全に透明な文脈であるとは言い難いが、後半部分によって透明な文脈であることがはっきりしている。

ている。したがって、指示的用法・限定的用法の区別が働きうるのである。

文 (24) については、Karttunen によれば、二通りにあいまいであって、一つは特定の読みであり、もう一つの読みは非特定の読みである。この文については、既に古川 (1979, p. 118) で論じたので、あいまい性の具体的な内容は省略するが、その中で、「名詞句 a logician は、あくまでも、特定の読みであって、その一つしかない特定の読みの枠内で二つの読みが可能」であり、この二つの読みが「指示的用法と限定的用法に関するあいまい性にほかならない」ことを指摘した。本稿においても、この考察に変化はないが、文 (24) における a logician が特定の読みであるという場合、この「特定性」は、本稿で明らかになった「透明の特定性」に相当することを付け加えなければならない。

§2.2.1. ここで、一見矛盾するように思われることがある。我々は、§1.2. において、透明な文脈における特定性を論じた際に、次の文 (28)

(28) [= (4)] Jean a attrapé un poisson.

における un poisson は、原理的に、特定の読みか非特定の読みかという二通りのあいまい性をもつことを述べた。そして、一方、前節 §2.2.0 では、同じく透明な文脈をもつ次の文 (29)

(29) [= (24)] I talked with a logician.

を考察して、a logician が指示的用法か限定的用法かという二通りのあいまい性をもつことを述べた。同じ透明な文脈に関するこの二つのあいまい性の主張が矛盾するものでないことを以下の図表で示したい。

(G)

前	指示対象の決定	後
特定の		指示的
非特定の		限定的

§1.2 においては、指示的用法・限定的用法の区別は考慮の外に置き、専ら特定性に関して論じ、発話時前 ($t-n$) の特定性に関するあいまい性は、発話時 (t_0) における透明の特定性によって、ぼやけてしまおうとしたのであった。この発話時前 ($t-n$) の特定性に関するあいまい性は、図表 (G) によって示される通り、指示対象が決定する前の、あいまい性なのである。あるいは、聞き手

が、発話による指示対象の決定を考慮に入れずに、話し手の意図を推測する際のあいまい性であると言い変えてもよい。

一方、指示的か限定的かというあいまい性は、図表 (G) によって示される通り、指示対象の決定を前提としたあいまい性なのである。

このように見てくると、指示対象の決定を聞き手が考慮に入れるか否かによって、二種類のあいまい性が出てくることになる。しかし、既に述べた通り、透明な文脈における発話時前 (t_n) の特定性に関するあいまい性は、発話時 (t_0) の指示対象の決定による透明的特定性によって、ぼやけてしまうので、実質的には、指示対象の決定を前提とする指示的用法・限定的用法のあいまい性のみが残ると考えられる。

最後に付け加えなければならないのは、一般的に、特定の非特定のあいまい性や指示的か限定的かというあいまい性は、文全体の意味や語用論上の要因の影響を受けるということである。そこで、このようなあいまい性の実際の発話の場への係わり方には、場合に応じて程度の違いがあるということである。たとえば、指示的用法・限定的用法に関するあいまい性は、文 (28) の場合よりも、文 (29) の場合の方が、発話の場への係わりが大きいと言えるかも知れない。論理学者が誰であるかを問題にすることはあっても、魚の身元を問うことは、通常、考えにくいからである。

以上のような理由から、本稿において具体的な例について述べたことは、あくまでも、原理的な考察である。

§3. ま と め

本稿における主張の要旨は次の通りである。

- (1) (a) 不定名詞句における特定性の概念には、二種類の特定性の存在が認められる。一つは、本稿で不透明的特定性と呼んでいるものであり、不透明な文脈において非特定性と対立する特定性である。もう一つは、本稿で透明的特定性と呼んでいるものであり、透明な文脈において唯一的に決定される特定性である。
- (b) 不透明な文脈においては、不透明的特定性のみが見られ、透明的特定性は現われない。発話時に指示対象の存在の一般化が成り立たないからである。
- (c) 透明な文脈においては、不透明的特定性と透明的特定性のどちらも見られる。力関係は、一般に、透明的特定性の方が強く、不透明的特定性は

ぼやけてしまうが、réussir のような動詞を含む文においては、不透明の特定性が言語表現に明瞭に現われうる。

- (2) 二種類の特定性の存在を認めることによって、従来、論じられてきた特定性と指示性の関係の問題により正確な解答を与えることができる。すなわち、定名詞句に見られる指示的用法・限定的用法の区別は、透明の特定性をもった不定名詞句、言い換えれば、透明な文脈に置かれた不定名詞句にのみ当てはまる区別である。この区別は、不透明の特定性をもった不定名詞句、言い換えれば、不透明な文脈に置かれた不定名詞句には当てはまらない。なぜなら、前者の場合には、指示対象の存在が決定しているため、指示的用法・限定的用法の区別が可能になるのに対して、後者の場合には、指示対象の存在が決定していないため、あいまい性の構造が、いわば、二段構えになっていて、このような複雑なあいまい性は、聞き手にとって負担過重であると考えられるからである。

BIBLIOGRAPHIE

- Baker, C.L. (1966). *Definiteness and indefiniteness in English*, Master's Thesis, University of Illinois. Reproduced by Indiana University Linguistics Club (1973).
- Donnellan, K. (1966). "Reference and definite descriptions", *Philosophical Review*, 75, 1966, pp. 281-304. Also in Steinberg and Jakobovits (eds.), *Semantics*, 1971, pp. 100-114.
- Fodor, J.D. (1979). *The linguistic description of opaque contexts*, Garland Publishing, Inc., New York & London.
- 古川直世 (1979). 「名詞句の指示機能と記述機能について」、『文藝言語研究』、言語篇、4, pp. 115-133.
- Galniche, M. (1977). "Quantificateurs, référence et théorie transformationnelle", *Langages*, N° 48.
- Geach, P.T. (1962). *Reference and generality*, Cornell University Press, Ithaca, New York. Emended edition (1968).
- Givón, T. (1973). "Opacity and reference in language: an inquiry into the role of modalities" in Kimball (ed.), *Syntax and Semantics*, 2, pp. 95-122.
- Ioup, G. (1977). "Specificity and the interpretation of quantifiers", *Linguistics and Philosophy*, 1, pp. 233-245.
- Karttunen, L. (1968). What do referential indices refer to? Reproduced by Indiana University Linguistics Club.
- (1971). "Implicative verbs", *Language*, Vol. 47, 2, pp. 340-358.
- Palacas, A.L. (1977). "Specificity in generative grammar", in Hopper (ed.), *Studies in descriptive and historical linguistics, Festschrift for Winfred P. Lehmann*, John Benjamins, Amsterdam, pp. 187-208.
- Partee, B.H. (1972). "Opacity, coreference, and pronouns", in Harman and

- Davidson (eds.), *Semantics of Natural Language*, D. Reidel Publishing Company, pp. 415-441.
- Pavel, T.G. (1976). "Noun phrases: logical and linguistic properties", *The Canadian Journal of Linguistics*, 21, 2, pp. 133-152.
- Peterson, D.J. (1974). *Noun phrase specificity*, Ann Arbor, Michigan, Xerox University Microfilms.
- Peterson, P.L. (1976). "An abuse of terminology: Donnellan's distinction in recent grammar", *Foundations of Language*, 14, pp. 239-242.